

# 石器と石材から考えるかながわの旧石器時代

小田原城天守閣 諏訪間 順

## 1 相模野台地の遺跡と層位

関東地方は、石器群を包含する地層が厚く堆積していることから、編年研究をはじめ多くの研究が進められている。中でも関東地方の西部に位置する相模野台地は、日本列島の中でも最も層位的出土例に恵まれたフィールドである。相模野台地は、石器群が包含されている立川ローム層が6～8mと厚く堆積しており、広域火山灰である始良丹沢火山灰(A T)や相模野上位スコリア層(S1S)、相模野下位スコリア層(S2S)、6枚の黒色帯などの鍵層の存在により、石器群を層位的に分離することが容易である(第1図)。

相模野台地を含む神奈川県は、2009年10月までに、456遺跡、856文化層の旧石器時代遺跡の存在が確認されている(栗原・加藤 2010)。現在では、伊勢原・秦野市域で第二東名自動車道関連の発掘調査が数多く行われており、県西部での遺跡分布の広がりや石器群の情報が集まりつつある(高屋敷 2016)。

相模野台地では、同一遺跡から数枚から10数枚の文化層が検出されることが多く、その文化層の特徴を石器の種類(器種)、製作技術(剥片剥離技術や調整加工技術)、使用石材などを検討すると、概ね、後期旧石器時代は10段階、石鏃が出現する以前の縄文時代草創期を2段階に編年区分が可能である(諏訪間 1988)。ここでは、石器と石材の変遷から神奈川県の旧石器時代について考えてみよう。

## 2 相模野台地の石材環境

相模野台地は、近隣に丹沢山地や箱根・伊豆山地などの石材産地を控え、石材環境に恵まれた地域である。相模野台地の最も近い石材産地は、硬質細粒凝灰岩とチャートである。硬質細粒凝灰岩は、丹沢山地及び相模川河床に産出し、台地内の河川の河床や礫層中からも採取が可能である。チャートは、多摩川流域に広く採集が可能である。この2者が最も近隣の石材産地であり、ともに半径10km以内で採取可能な在地石材といえる。そして、相模野台地の西に約半径30km～50kmには、箱根山中に箱根畑宿産黒曜石や箱根山から早川沿岸にかけて箱根産ガラス質黒色安山岩の産地がある。さらに、70km以内には伊豆柏峠産の黒曜石原産地があり、これらは近在地産石材といえる(諏訪間 2006)。

相模野台地に搬入される遠隔地石材は、和田峠を中心とした信州産や、伊豆七島の神津島恩馳島産など150km圏の黒曜石があり、これらは特定の時期に大量に搬入されている。一方、北関東地方の高原山産黒曜石や東北地方の硬質頁岩などの遠隔地石材は、相模野台地への搬入は極めて限定的な存在である。

相模野に搬入された石材産地と距離は次のとおりである。

**在地石材**：10km以内 丹沢産硬質細粒凝灰岩・多摩川産チャート 日帰り採集

近在地石材：30km～70km 前後 畑宿産黒曜石、箱根産ガラス質黒色安山岩、柏峠産黒曜石 一泊程度の採集

遠隔地石材：100km 以上 信州系黒曜石、高原山産黒曜石、神津島産黒曜石、東北系硬質頁岩 数日以上の採集・集団単位での移動もしくは交換による可能性

### 3 相模野台地における石器群の変遷

ここでは、相模野台地の石器群の変遷と石材構成・黒曜石産地構成について概観する（第2図～第4図）。

#### ・段階Ⅰ石器群

本段階は、L 6層からB 5層上面までに出土層位を持つ石器群である。吉岡遺跡B 5層石器群は、台形様石器（第2図 1.2）、ナイフ状石器（3.4）、楔形石器、彫器などが報告されている。

#### ・段階Ⅱ石器群

本段階は、L 5上部～B 4上面までとし、台形様石器（5）と基部加工（6）、一側縁加工ナイフ形石器（7）、局部磨製石斧（8）を特徴とする。剥片剥離技術は石刃・縦長剥片剥離技術の存在が確認されており、横長・幅広剥片剥離技術の両者が認められる段階である。

石材構成は、箱根産ガラス質黒色安山岩、チャートに加え、硬質細粒凝灰岩など近在地産石材で占められている。黒曜石は、箱根畑宿産黒曜石が最も利用されており、伊豆柏峠産黒曜石が続き、信州産黒曜石は少ない。古淵B遺跡ではB4層から畑宿産黒曜石を用いた台形様石器などがまとまって出土している。津久井城跡馬込地区第6文化層（B 4層）では、台形様石器などに神津島恩馳島産黒曜石の利用が確認されている。

#### ・段階Ⅲ石器群

本段階はB 3下部を中心とするが、B 4上面との判別はできない。縦長剥片に段階Ⅱから続く基部加工（10・11）や一側縁加工（12・13）のナイフ形石器に加え、二側縁加工ナイフ形石器（14）が新たに登場する段階である。

石材構成は、段階Ⅱと変わらず、箱根産ガラス質黒色安山岩、チャートに加え、硬質細粒凝灰岩など近在地産石材で占められている。黒曜石は柏峠産、畑宿産が多い。

#### ・段階Ⅳ石器群

本段階はB 3上部～B 2L下部まで、A T層、S 1 S層を挟んだ上層までが相当する。二側縁加工のナイフ形石器（15～19）とそれを量産するための石刃技法が強固な結びつきを持つ段階である。

石材構成は、黒曜石が9割以上と多用される段階である。黒曜石以外は良質の硬質細粒凝灰岩や箱根産ガラス質黒色安山岩も使われている。

黒曜石は寺尾遺跡、橋本遺跡など大規模な石器群では信州産黒曜石が多用されている。一方、中～小規模石器群では、柏峠産が用いられている。慶応SFC遺跡第V文化層は、A T降灰以後の石器群であるが、畑宿産で占められている。

#### ・段階Ⅴ石器群

本段階はB 2L下部～B 2Uまでで、切出形ナイフ形石器（23・24）、基部加工ナイフ形石器（26）、角錐状石器（22）、円形搔器（27）が特徴的な段階で

ある。本段階は横長・幅広剥片剥離技術と鋸歯状の粗い調整加工である点が前後の段階との大きな違いである。

石材構成は、箱根畑宿産、伊豆柏峠産の黒曜石、硬質細粒凝灰岩、ガラス質黒色安山岩の在地・近在地石材によって占められる。

B2Uを中心とする後半には信州産黒曜石も搬入されるようである。遠隔地石材の搬入は極めて少ない。

#### ・段階Ⅵ石器群

本段階はL2からB1中部までで、二側縁加工(29~31)と部分加工(32)のナイフ形石器、男女倉型有樋尖頭器(28)が特徴的な段階である。他に先刃搔器、上ヶ屋型彫器(33)、小坂型彫器(34)、ノッチ(35)などの加工具類が豊富になることも本段階の特徴である。ナイフ形石器をはじめ石器のほとんどが「砂川型刃器技法」と呼ばれる両設打面を典型とする石刃技法により剥離された石刃を素材として製作される。

石材構成は、硬質細粒凝灰岩やチャート、箱根産ガラス質黒色安山岩などの在地石材が多用されており、黒曜石の利用は相対的に少ない段階である。黒曜石は、南鍛冶山遺跡や本蓼川遺跡などで柏峠産が主体的に使われている。また、相模野台地から少し離れた丹沢山地の宮ヶ瀬遺跡群中原遺跡、咳止橋遺跡などでは信州産のまとまった利用が認められる。尖頭器には深見諏訪山遺跡などにみられるように信州産黒曜石が主体に用いられている。

#### ・段階Ⅶ石器群

本段階はB1上部～上面までを出土層位とし、打面を残置する幅広の二側縁加工のナイフ形石器(下九沢山谷型)(41・42)、小形幾何形ナイフ形石器(43・44)が主体となり、二側縁加工のいわゆる茂呂型ナイフ形石器は小型化になる段階である。剥片剥離技術は両設打面の石刃・縦長剥片剥離技術は明確には認められず、90度の打面転位を繰り返すものや、幅広で寸詰まりの縦長剥片を剥離するものになる。

石材構成は、多くの石器群が黒曜石を9割以上用いるという極めて石材が偏った段階といえる。深見諏訪山遺跡や中村遺跡は、幅広の縦長剥片を素材とする下九沢山谷型ナイフ形石器が特徴的であるが、これらの石材には箱根畑宿産の黒曜石が多用されている。一方、田名向原遺跡や下鶴間長堀遺跡などでは小型尖頭器が大量に制作されているが、これらには信州産黒曜石が用いられている。

本段階の特徴として、ナイフ形石器や尖頭器などの製作される器種により黒曜石産地が明確に使い分けられていることを指摘できる。

#### ・段階Ⅷ石器群

本段階はL1H中部を中心とする出土層位で、中型の尖頭器を主体となる段階である。尖頭器は両面加工(45)、半両面加工(46~48)、片面加工(49)とバラエティーを持つが、両面加工のものが多く、大きさのバラエティーも顕著である。ナイフ形石器は各石器群に数点と極めて少ない。加工具類は大型の削器(51)が伴う。大型の剥片や縦長剥片を素材とした尖頭器製作が主体であり、遺跡内での剥片剥離の痕跡を残さない場合も多い。

石材構成は、前段階で主体を占めた黒曜石が激減し、代わってガラス質黒色安山岩やチャートが主体となる。尖頭器のサイズに見合った大きさが確保できる在地石材が主体となっている。黒曜石は月見野上野遺跡や宮ヶ瀬サザランケ

遺跡などでは少なからず利用されているが、そのほとんどが柏峠産である。

#### ・段階Ⅸ石器群

本段階はL1H上部～B0下部までに出土層位がある細石刃石器群である。石器組成は、細石刃核（52～55）、細石刃（56～59）、削器（60）、錐器、礫器などで構成される。

L1H上部の吉岡遺跡群B区、代官山遺跡第Ⅲ文化層では伊豆柏峠産黒曜石の小角礫を素材とし、打面調整を施さず分割面を打面とする「代官山型」細石刃核がまとまって出土している（52・53）。B0層では、打面調整が顕著となる典型的な「野岳・休場型」の細石刃核になり（54・55）、神津島産や信州産の黒曜石に原産地が変わる。

石材構成は、黒曜石の高い利用が認められる。石材のサイズなどの特性により、細石刃には黒曜石、削器などの小型石器にはガラス質黒色安山岩、礫器などの大型石器には凝灰岩やフォルンフェルスがそれぞれ使われている。

黒曜石の産地構成は、「代官山型」細石刃核には柏峠産が、「野岳・休場型」細石刃核には神津島産が特徴的に使用されている。

#### ・段階Ⅹ石器群

本段階はB0中部～L1S上部までに出土層準を持つ細石刃石器群で、「野岳・休場型」（62）に加え、「船野型」細石刃核（61）が組成に加わることを特徴とする。細石刃核は段階Ⅸよりも一回り大きく、細石刃（63～68）も幅広で長くなる傾向がある。石器組成は単純で大型の削器（69）や礫器が伴うことが多い。

石材構成は、前段階とほぼ同じであるが、「野岳・休場型」は神津島産黒曜石が多用され、「船野型」は硬質細粒凝灰岩などの在地系石材を素材とする。また、B0層中の石器群は神津島産黒曜石が主体となるが、L1S下部では削器などはガラス質黒色安山岩や硬質細粒凝灰岩である。

黒曜石の産地構成は神津島産が多用されるが、石器群によっては信州産が主体を占めることもある。

#### ・段階ⅩⅠ石器群

本段階はL1S中部～漸移層までに出土層位を持ち、尖頭器（76）、搔器、削器、石斧などに削片系細石刃核（71・78）、細石刃（73～75）が共伴する段階である。また、隆起線文土器以前の最古段階の土器群（70）が共伴する段階でもある。

石材構成は、黒曜石がほとんど使われなくなり、ガラス質黒色安山岩、硬質細粒凝灰岩などの在地石材が多用される。黒曜石は信州産や畑宿産などが使われている。

#### ・段階ⅩⅡ石器群

本段階は漸移層～富士黒土層下部に出土層位を持ち、有舌尖頭器（78・79）、搔器（80）、ドリル（81）、打製石斧（82）などに隆起線文土器群と共伴する段階である。石鏃は花見山遺跡、三ノ宮下谷戸遺跡など相模野台地周辺部の大規模な遺跡での共伴は認められるものの、台地内では明確な共伴事例は少ない。

石材構成は、前段階同様に黒曜石の使用は少なく、ガラス質黒色安山岩やチャートを主体としている。黒曜石は神津島産が使われている。

## 4 相模野台地における石材構成と黒曜石利用の変遷

相模野台地における石器群の変遷はそれぞれ区分された段階毎に石材構成に特徴が認められる時期がある。相模野台地の石器群を通史的に見ると黒曜石が多用される時期、使われない時期が認められる。

吉岡遺跡 D 区 B5 層では信州産黒曜石が 1 点出土しており、相模野台地最古の石器群から黒曜石利用が行われていることが確認されている。

**段階Ⅰ～Ⅲ石器群**は、一石器群の規模も大きくないため、特定の石材に偏っている。石器群によっては黒曜石が多用されるものもあるが、相対的には黒曜石の利用は少なく、黒曜石の産地は、畑宿産・柏峠産が主体となり、神津島産も認められる。段階Ⅱ石器群と並行する武蔵野台地Ⅸ層や愛鷹・箱根山麓 BBV-Ⅳ層出土石器群では、神津島産黒曜石が多用される傾向が指摘されていたが、津久井城跡馬込地区第 6 文化層(B 4 層)の存在は、これを相模野台地においても裏付けることとなった事例である。

黒曜石の利用が本格化するのは、B3 上部～B2L 下部に出土層位を持つ段階Ⅳ石器群からである。大規模な遺跡である寺尾遺跡第Ⅵ文化層や橋本遺跡第Ⅴ文化層では大量の信州系黒曜石が搬入されるが、中～小規模の石器群では近在地である柏峠産黒曜石に依存している。A T 降灰以後は信州産黒曜石の利用は減少し、慶応 F S C 遺跡第Ⅴ文化層では畑宿産黒曜石で占められている。続く、段階Ⅴ石器群も前段階ほどの高い利用ではないものの、畑宿産及び柏峠産黒曜石の高い利用が認められる。また、本段階の終末である B2U 層では信州産黒曜石の利用も認められるようになる。段階Ⅴでは、点数的には黒曜石の高い利用が認められるが、重量では硬質細粒凝灰岩が最も多く、ガラス質黒色安山岩などがこれに続いている。

段階Ⅵ石器群になると硬質細粒凝灰岩やチャートなどの在地石材に依存した石器群になり、黒曜石の利用が減少する。しかしながら、本蓼川遺跡や南鍛冶山遺跡などでは柏峠産黒曜石の高い利用が認められる石器群もある。畑宿産黒曜石はこの段階での利用は限定的で月見野Ⅱ遺跡のみにまとまって検出されている。

続く段階Ⅶは、黒曜石が多用される段階である。畑宿産は打面を残す二側縁加工ナイフ形石器(下九沢山谷型)や小形幾何学形ナイフ形石器との強い関係が認められる。一方、小形尖頭器が多く出土する石器群もあり、下鶴間長堀遺跡第Ⅱ文化層や田名向原遺跡 No.4 遺跡住居状遺構などでは信州産黒曜石が多用されている。

段階Ⅷ石器群は尖頭器を主体とするが、ガラス質黒色安山岩やチャートが主体となっている。この段階では月見野上野遺跡などで柏峠産黒曜石を用いた石器群があるが限定的である。

段階Ⅸ・Ⅹ石器群は細石刃石器群であるが、この段階になると黒曜石の利用が増加する。L1H 上部の代官山遺跡第Ⅲ文化層や吉岡遺跡群 B 区 L1H 上部石器群、三浦半島の打木原遺跡の 3 石器群はほぼ全てが柏峠産黒曜石で構成される細石刃石器群である。これらは柏峠産黒曜石の小角礫の形状をそのままか、分割した細石刃剥離工程が認められる。続く、B0 層になると「野岳・休場型」細石刃核を特徴とする細石刃石器群に転換し、一部、信州産黒曜石が認められるものの、神津島産黒曜石が圧倒的に利用される細石刃石器となる。

続く、段階 X I・X II 石器群は、縄文時代草創期に位置づけられる時期であるが、黒曜石の利用は極端に減少し、ガラス質黒色安山岩やチャートが主体となる。

以上、相模野台地における黒曜石産地構成の変化からは、畑宿産と柏峠産黒曜石は、近在地産石材ということで、常に供給される環境にあったものと考えられる。一方、信州産黒曜石と神津島産黒曜石は、流通する時期が限定的である。

信州産黒曜石は、段階 IV の B3 上部と段階 VII の B1 上部の 2 時期に大量に搬入・使用されていることが確認できる。段階 V では信州産黒曜石が減少するが、寒冷化に伴い標高 1000m を超える中部高地の黒曜石原産地への原石獲得は相当に困難であったものと想定できる。

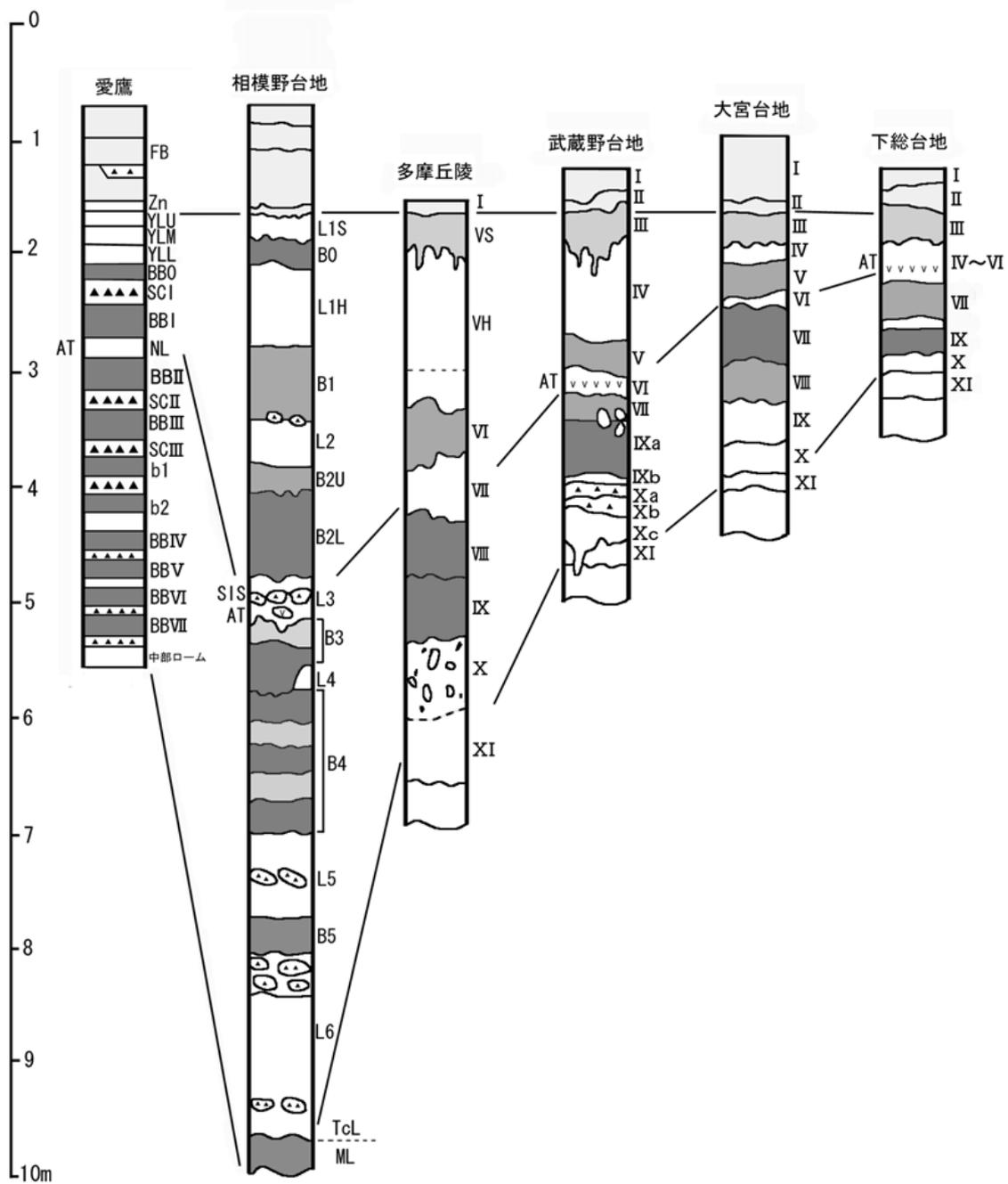
神津島産黒曜石は、B4 層と B0 層の 2 時期が中心となっている。両時期ともに寒冷期の中でも前後の時期に比べ温暖であった可能性があり、伊豆半島と神津島との海峡の潮流が緩やかで安定していたものと推定できる(池谷 2009)。

こうした信州産黒曜石や神津島産黒曜石などの相模野台地から 150km 以上も離れた地域から搬入された遠隔地石材である黒曜石の供給のされ方は、集団の行動領域や社会構造の変化、寒冷化適応などを探る手がかりになるものと考えられる(諏訪間 2002)。

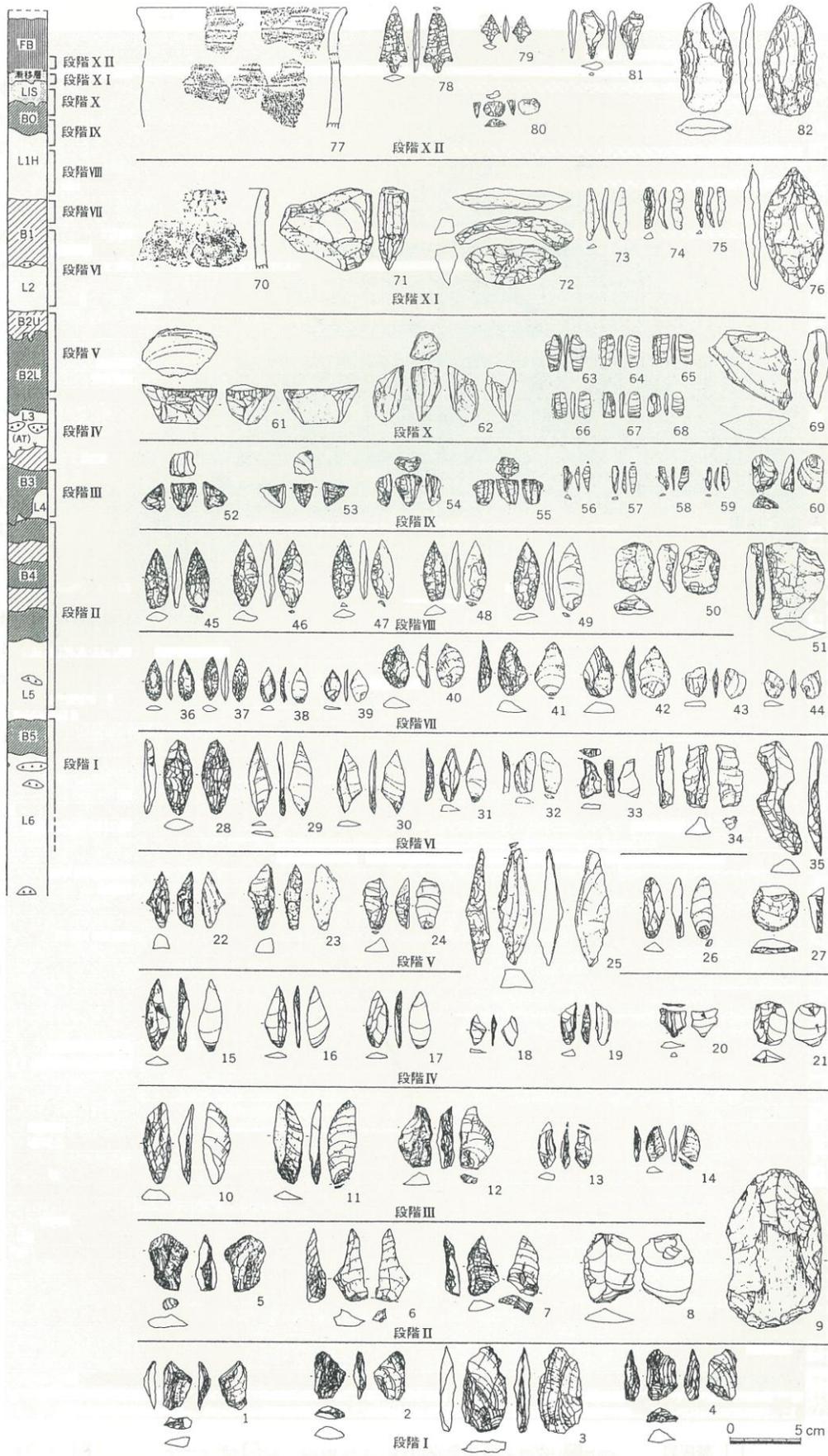
(本レジュメは諏訪間 2013 を基に再構成したものである)

## 参考文献

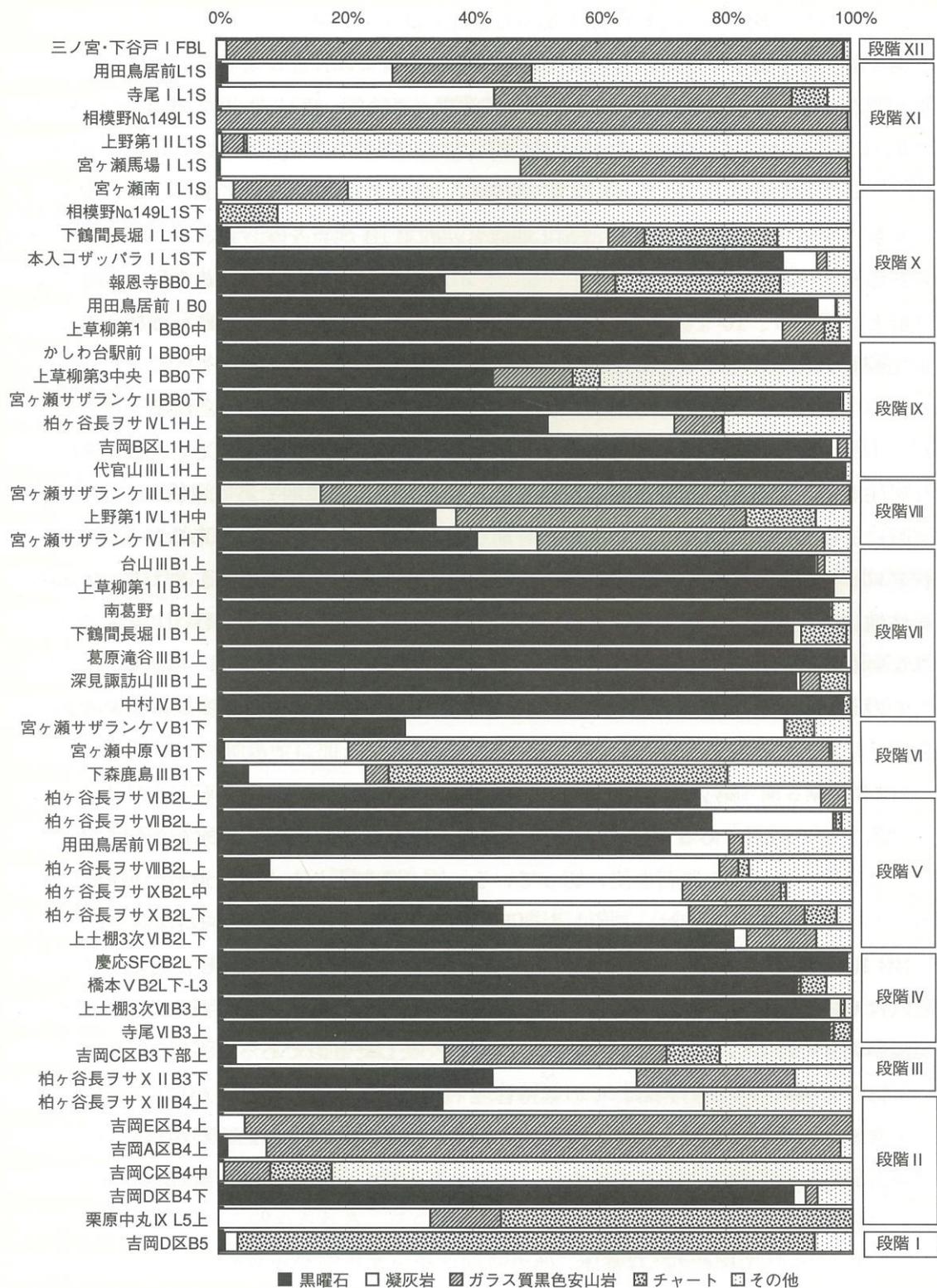
- 池谷信之 2010『黒曜石考古学』新泉社
- 栗原伸好・加藤勝仁 2010「神奈川県」『日本列島の旧石器時代遺跡』日本旧石器学会
- 鈴木次郎 1986「ナイフ形石器の終末と槍先形尖頭器石器群の出現」『神奈川考古』22 神奈川考古同人会
- 諏訪間順 1988「相模野台地における石器群の変遷について－層位的出土例の検討による石器群の段階的把握－」『神奈川考古』24 神奈川考古同人会
- 諏訪間順 2001「相模野旧石器編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』神奈川県考古学会
- 諏訪間順 2002「相模野台地旧石器編年と寒冷期の適応過程」『科学』72-2 岩波書店
- 諏訪間順 2006「相模野台地における黒曜石利用の変遷」『黒曜石研究』4号明治大学黒曜石研究センター
- 諏訪間順 2010「天城柏峠産黒曜石の流通」『黒曜石が開く人類社会の交流』Ⅱ「黒曜石の流通と消費から見た環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容」グループ
- 諏訪間順 2013「相模野台地の石器群変遷と黒曜石利用の変動」『リバティアカデミーブックレット 黒曜石をめぐるヒトと資源利用 PART 2』明治大学リバティアカデミー
- 高屋敷飛鳥 2016『かながわの最初の現代人－旧石器時代のヒトと社会』平成28年度かながわの遺跡展・巡回展図録
- 中村雄紀 2014「関東地方における旧石器時代の年代と編年」『旧石器研究』第10号日本旧石器学会
- 矢島國雄、鈴木次郎 1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1 神奈川考古同人会



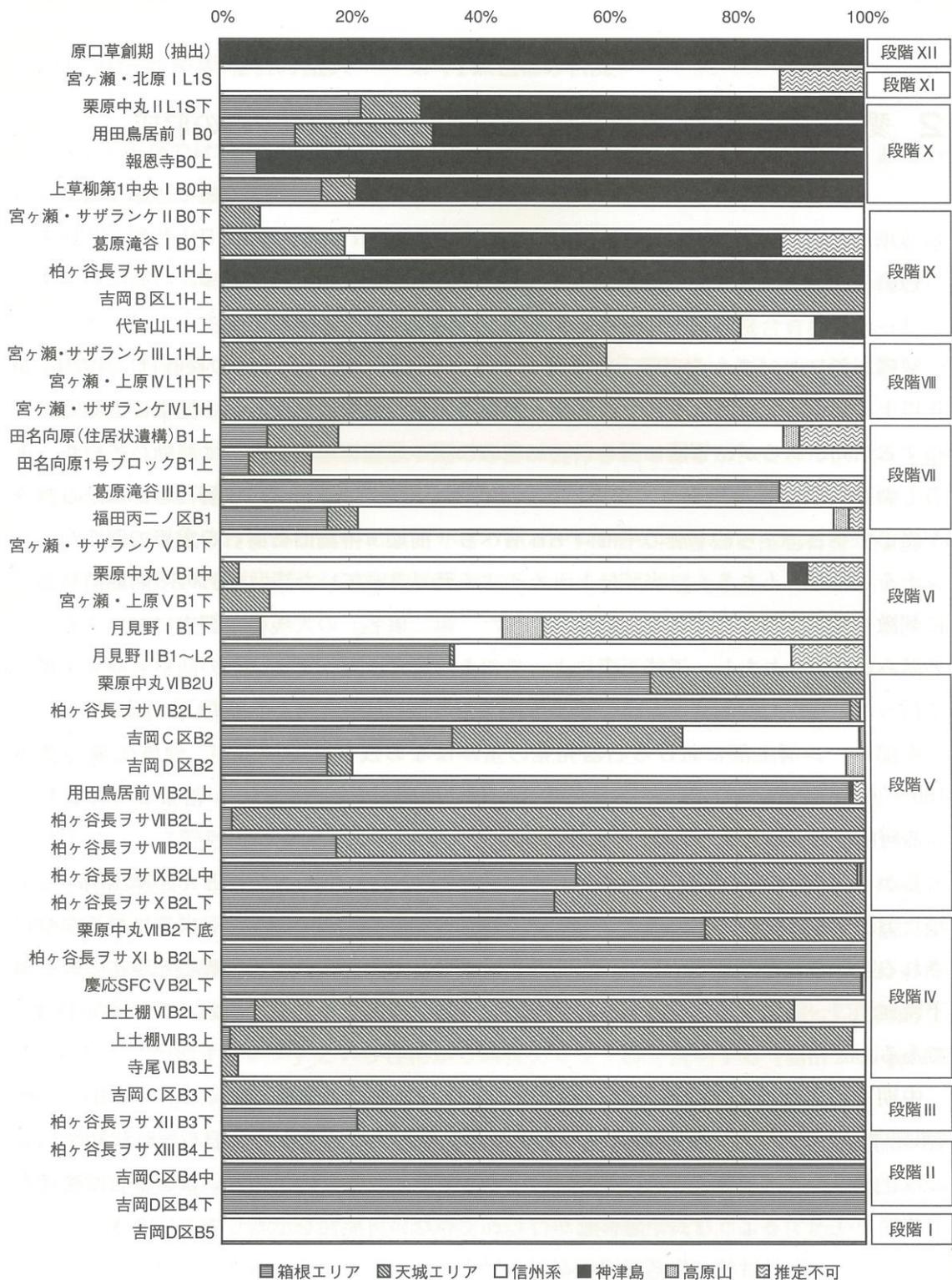
第 1 図 東海東部から南関東地方の層位対比図



第 2 図 相模野台地の石器群の段階変遷図



第 3 図 相模野台地の石材構成図



第 4 図 相模野台地の黒曜石産地構成図